

ひとを「信じる」必要はありません

まぐまぐ殿堂入り・日刊メールマガジン

「今日のフォーカスチェンジ」第2728号
(2011年4月19日発行)より

長いこと、子どもたちの演劇活動に、かかわっています。そのなかで、私がつくづく思うのは、「子どもは信用できない」ということです。(笑)

稽古のあいだじゅう、いつも、はらはらさせられます。「まだここまでしかできてない」「こんなんでも本番どうなるんだ」「もっと本気を出せ！」そんな思いはしょっちゅうです。

ところが、本番。子どもたちは、みごとにまで、私たちに裏切るのです。

みんなのところがひとつになって、本気で、そこにいる姿が、どうしようもなくまぶしいのです。これまでの稽古のどの回よりも、最高の演技をして

くれるのです。

もちろん、稽古だって、手抜きをしているわけではないのです。でも、積み上げていかななくてはならないことが、山のようにあり、ついつい、課題と思うことばかりに、目がいってしまうのです。

本番の輝く舞台を見ながら、「うそつき〜！」「これを稽古のうちに見せろよ〜」などと、うれしい悪態(笑)をつきながら、あらためて思います。この変容を信じられるから、活動をつづけてきたんだなあ。

私たちは、日常のなかで、「事実」を見ているように思っていますが、本当はそうではありません。自分の「信じている」ものを見ているのです。

もっと言うと、自分がそれまで築きあげた価値体系や信念体系にもとづいて、判断しているだけなのです。

私たちは、稽古のなかで、絶対に子どもたちは、変わる！最高の舞台をつくってくれる！と、固く信じています。そして、そうなるように、全力ではたらきかけます。

かたちとして、充分でないところの指摘はしますが、子どもの可能性そのものを、うたがったことはありません。

それは、同時に、私たちが子どもとどのように向き合うか、ということでもあるのです。

子どもの可能性を本気で信じて向き合うとき、子どもたちはそれにこたえてくれます。子どもたちが、不完全燃焼のような舞台をしてしまうとしたら、それは私たちの責任なのです。

「ひとを信じる」というとき、私たちは、そのひとの何かを「信じて[いる]のではなく、そのように見ている自分を

「信じて」いるのです。

本気で自分を「信じる」なら、目の前にどのようなかたちがあらわれようと、自分の内がわに照らしてみればいだけいです。そして、それにたいして、自分がどうあるかを、決めればいだけいです。

というわけで、今日の結論です。ひとを「信じる」必要はありません。代わりに、自分を「信じて」ください。「信じる」自分として生きてください。

そしたら、それにふさわしい現実があらわれます。楽しみですね！

●日刊メールマガジン「今日のフォーカスチェンジ」(かめおかゆみこ編集・発行)は、2003年11月1日創刊。2011年3月、2700号達成。3秒読める携帯版もあり。無料講読は「かめわざ快心塾」から♪

<http://kamewaza.com/>